

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第73号

● Contents ●

論点：北極域研究とロシア	高倉 浩樹	1
Topic: Arctic Studies and Russia	(TAKAKURA Hiroki)	1
東北アジア通信：モスクワ大学との学術交流	工藤 純一	2
スターリンとモンゴル、新疆	寺山 恭輔	3
Northeast Asian Reports:		
Academic Exchanges with Lomonosov Moscow State University	(KUDOH Jun-ichi)	2
Stalin and Mongolia, Sinkiang	(TERAYAMA Kyosuke)	3
会員の広場：ロシアとの草の根文化交流	千葉 麻里	4
Members' Forum: The grass roots cultural exchange with Russia	(CHIBA Mari)	4



北極域研究とロシア

東北大学東北アジア研究センター長
高倉 浩樹



4月から新たに東北アジア研究センター長となりました。また5月の総会で懇話会の理事長にも就任いたしました。会員の皆様にご挨拶申し上げると共に、今後も東北アジア研究センターの活動にご理解とご支援をいただきたくお願い申し上げます。筆者はこれまで文化（社会）人類学の立場からロシア＝シベリア研究に携わってきましたが、近年、自然科学との共同研究を推奨する傾向が国内外で動いているように感じています。管見の限りではありますが、そのことについて紹介させていただきます。

*

*

従来、日本でロシア研究といえば、歴史学や政治学を中心とする人文社会科学的なものであった。冷戦時代、ソ連をどう評価するかについての立場の違いはあったにせよ、ユーラシア北方の大国の文化・歴史・政治経済についての解明が試みられてきた。社会主義体制崩壊後は、現地での調査が可能になったことにより、新たに人類学や社会学的な観点からのフィールド研究も行われ、社会文化的側面も含めた総合的理解が進んでいる。



機内から撮影したアラスカ上空(2016年3月)

一方、人文社会系の研究者にはあまり知られていないが、シベリアの環境は、多数の自然科学者によって関心が持たれてきた。1990年代以降にフィールド観測が可能になると、シベリア地域と全球環境との相互作用の解明が理学・工学を総合して行われている。この動きは、地球温暖化を含む気候変動研究と連動している。彼らが調査を行うのはロシアの自然の解明というよりも、むしろ地域のデータが地球環境に

どのような意味をもつか調べるためである。この点で特に注目されているのは、地球環境に大きな影響を及ぼすロシアの北極域（海域・陸域）なのである。日本では1990年に国立極地研究所内に北極圏環境センターが設置され、1992年には国際北極科学委員会にも加盟し、同センターは牽引的役割を果たしている。

ここからは筆者の推測だが、理系中心だった日本の北極域研究が近年急速に文理融合的にシフトしている。その背景には国際的動向がある。国際北極科学委員会や国際機関である北極評議会のなかで、学際的研究や応用研究が重視されているからである。筆者は2013年4月から2017年3月から国際北極科学委員会人間社会作業部会日本委員を務めたが、そこでの活動を通して、北極域の国家統治の歴史やステークホルダーとしての先住民の伝統文化の再評価、北極海航路の利用可能性など社会経済的側面と自然科学の知見の総合化が求められていると感じた。2015年には日本政府が「我が国の北極政策」を発表したがそのなかでも、これらの点は重要な課題として指摘されている。同年、北海道大学では文理連携の北極域研究センターが設置された。また我が国で最初の北極科学サミット週間（ASSW）が富山で開催されたが、自然科学者だけでなく、多くの政治学者や人類学者が来日した。この意味で2015年は日本の北極年というべき年だった。

北極域研究という枠組みのなかでロシア＝シベリア研究の重要性があらためて注目されている。従来の人文社会科学のロシア研究は、ヨーロッパロシア中心で、シベリアや極東は地方研究に過ぎなかった。そうした視座を転回させた、新たなロシア＝シベリア＝北極研究の確立が求められているように思うのである。

東北アジア通信

モスクワ大学との学術交流



東北大学東北アジア研究センター教授
(環境情報科学分野) 工藤 純一

私は2011年度から2014年度までロシア交流推進室の任務としてモスクワ大学を訪問している(写真1)。今回は紙面に限りがあるため概要を述べたい。

モスクワ大学は日本や欧米のような大学と異なり世界的にみても特異な大学である。ロシア教育科学省は日本の文部科学省に相当し、ほとんどの大学が属している。しかし、モスクワ大学は首相府の直属であり、大統領が学長を任命する。さらに、大学評議会の議長は大統領である。現在のサドーブニチイ学長は1992年の就任なので2017年時点で学長在任期間が25年になる。また、かつてロシアで博士号を取得するのは大学ではなく科学アカデミーであったが、その当時からモスクワ大学には博士課程があった。このように別格扱いの大学である。ちなみに、1953年に竣工した現在の大学本館はスターリン様式建築の最も大きな建物であり、大学の建物としても世界最大としてギネスブックに登録されている。

モスクワ大学は学生数約5万人、職員数約1万5千人のマンモス大学で、日本でいうならば東京大学に相当する大学である。学生、特に理系の学生はロシア各地からの秀才が集い、極めて優秀である。そして、モスクワ大学の卒業生としての誇りも高い。

本学は流体科学研究所が世話部局になり、2002年に大学間学術交流協定を締結し、お互いに事務所を有している。その後、2010年にロシア代表事務所を設置し、2011年頃からはグローバル30プログラムの支援もあり、ほとんどの学部・研究科が学生交流を中心に行っている。私の任務はモ

スクワ大学のスタッフの中に入り、一緒に学生交流の支援を行うことであった。この間の主な成果を次に列挙する。

日露間の教育研究交流に関する協議(2011.8.3在露大)・東北大学ーロシア科学アカデミーセミナー 開催(2011.11.25)・第1回日露人文社会フォーラム準備支援(2011.12.8-9)・第1回日露大学合同説明会準備(2011.12.8)・東北大学とロシア科学アカデミー極東支部大学間学術交流協定締結準備(2012.1.23)・インターネットによるモスクワ大学と日本の大学の留学生面接試験(2012.2.28)・第3回日露学長会議の準備(2012.3.19-20)・東北大学とニジェゴロド大学 大学間学術交流協定締結準備(2012.3.19)・東北大学と極東連邦大学 大学間学術交流協定締結準備(2012.3.19)・ISTC PJ#4010 研究推進・第3回日露学長会議準備(2012.3.19-20)・第3回日露大学合同説明会準備(2012.12.10)・第1回日露医学フォーラム準備実施(2012.12.10)・国際科学技術センター(ISTC)と共同研究・第4回日露大学合同説明会準備(2013.3.15)・第5回日露大学合同説明会準備支援(2013.10.8)・第4回日露学長会議準備(2013.10.10)・第6回日露大学合同説明会準備(2013.10.10)・第2回日露人社フォーラム準備支援(2013.10.11)・日露学生交流事業準備実施(モスクワ大学生へ日本人大学生100名派遣(2014.3.16-22)・第7回日露大学合同説明会準備支援(2014.3.27-28)・世界展開力強化事業(ロシア)申請準備・国立高等経済学院と大学間学術交流協定支援(2014.9.30)・サンクトペテル大学と大学間学術交流協定支援(2014.10.1)・インターネットによる環境科学研究科入試面接支援(2014.12.18)・数学ジョイントセミナー準備実施(2015.2.17-19)・第5回日露学長会議準備支援(2015.3.3)・第1回ITジョイントセミナー準備実施(2015.3.5-6)・第2回医学フォーラム準備支援(2015.3.5-6)・第2回ITジョイントセミナー準備実施(2015.9.7)

2015年度からは自分とモスクワ大学の共同研究の準備を開始し、Research on CO₂ Reduction System by the Huge Forest Fires Control for Global Warming Problemを実施している。

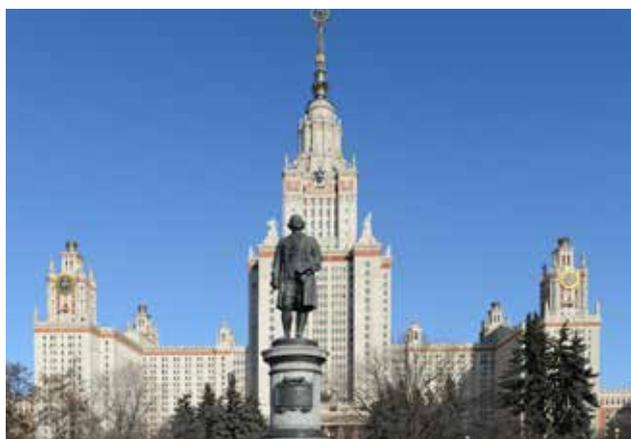


写真1.モスクワ大学の裏正面

東北アジア通信

スターリンとモンゴル、新疆

東北大学東北アジア研究センター教授 寺山 恭輔
(ロシア・シベリア研究分野)



筆者はスターリン時代のソ連の東方政策について研究を進めている。我々日本人にとってなじみの深い問題は、スターリンの決定による1945年のソ連の対日参戦とそれに伴って生じた北方領土問題であり、戦後70年以上を経過した現在に至るまで日露両国間の懸案事項として残されていることは言を俟たない。また金王朝三代目が国際世論を無視して核爆弾とミサイルの発射実験を繰り返している北朝鮮や中華人民共和国の誕生にもスターリンが密接に関わっていたことを想起すれば、スターリン時代の東方政策の解明は東北アジア地域の現状を歴史的に理解する上で大きな意義を有するといえるだろう。

ここ数年の研究成果が、2015年3月に出版した『スターリンと新疆:1931-1945』(社会評論社)(写真1)、今年3月に出版した『スターリンとモンゴル:1931-1946』(みすず書房)(写真2)である。これらの著書について概略を説明することにした。



写真1. 「スターリンと新疆」

ロシアが北米大陸への進出をあきらめ、中国国内の混乱に乗じてアムール川左岸、沿海地方を獲得して極東へ本格的に進出し始めたことをもって、東アジアに北のロシアも加えたいわゆる東北アジア地域の大きな枠組みができたのが19世紀半ばである。日本の明治以降の歴史とも重なり、日本に開国を迫った米国ともども主要なプレーヤーが東北アジア地域に集結し、これらの相互関係の中で同地域の近現代史が展開されることになる。21世紀初頭の現在もこの構図に変化はない。東方に目を向け始めたロシアは中国との国境隣接地域(新疆、モンゴル、満洲)において様々な形で接触、交流を深めたが、中国からの独立を志向しロシアが大きな影響を及ぼした新疆、モンゴルのうち、後者だけが独立を果たすことになった。

イスラム教を信仰するウイグル人が人口の大半を占めていた新疆に対し、ロシアは中国本土と比べてアクセスのしやすさを有していた。そういったロシアの経済的優位性は、シベリアと中央アジアを結び新疆にも近いトルクシブ鉄道がソ連時代に開通するとますます強まり、同地域の政治に

まで深く関与することになる。その象徴がソ連共産党への入党まで志願した新疆省督弁盛世才である。独ソ戦でいったんは減退したソ連の影響力は戦況の好転により復活し、大戦後にスターリンは蒋介石にも圧力をかけ、最終的に毛沢東の手に新疆を委ねることになった。

一方のモンゴルでは、上述の通りロシアの極東進出と同時に19世紀半ばに開設した領事館の活発な活動が奏功し、辛亥革命後ハルハ族を中心に独立を目指す人々がロシア帝国に支援を求めるが、ソ連時代になってもこの流れは基本的には変わらず、ソ連はモンゴルに対する政治的、経済的な影響力をますます強めていった。1932年の満洲国の成立はこの流れに拍車をかけ、日本によるシベリア出兵再来を警戒したスターリンは、満洲国西隣のモンゴルもソ連の国防にとっての重要な砦とみなし、国防力強化、人材育成に取り組むようモンゴル指導者に重ねて訴えた。兵士になるべき成年男子の多くが僧侶として奪われるチベット仏教が敵視され、弾圧された。そして対満洲国だけでなく戦後の中国との緩衝地帯としてモンゴルの地政学的地位を重視したソ連は、英米とのヤルタ会談でモンゴル独立を主張し、最終的には蒋介石に認めさせてその独立を確保することになった。

拙著ではソ連の新疆、モンゴルに対するスターリン指導部の関与の実態を、一次史料を活用して論証することに努めた。スターリンに情報が集中し、重大な問題については細かい指示を出していたことが明らかになった。ただし史料については問題も多い。中国の状況も似たようなものだが、ロシアの史料館の史料で秘匿されているものも多い。特に独立を果たせなかった新疆についてはソ連の生々しい介入の実態を隠すためか、現在に至るまで多数の史料が未公開のままである。近い将来に公開される保証もない。現代史研究ではこのように史料公開の限界が付きまとうが、存在する史料をもとに可能な限りの描写を試みるしかない。西から進めてきたソ連の東方政策の次のターゲットはソ連極東地域である。北方領土問題が発生するまでの流れを追うつもりである。

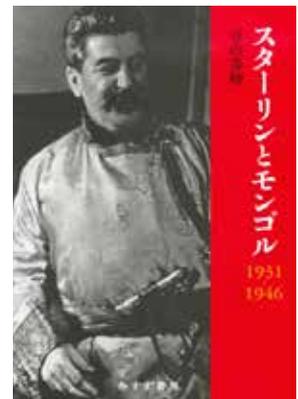


写真2. 「スターリンとモンゴル」

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです。今回は、NPO日ロ交流協会 常任理事・事務局長の千葉麻里様に「ロシアとの草の根文化交流」に関しまして、ご執筆いただきました。NPO日ロ交流協会が行ってきた行事やこれまでの草の根交流の現場に関してご紹介いただきました。

ロシアとの草の根文化交流

NPO日ロ交流協会 常任理事・事務局長 千葉 麻里



NPO日ロ交流協会は、政治色もイデオロギーもない草の根の文化交流団体です。当初は任意団体でしたが、2000年に当時の西澤潤一会長のもとNPO法人とし、今年で設立52年目で一昨年、50周年をいたしました。

設立当初よりロシア大使館との交流が盛んで、一時は大使館で合同新年会を催していたほどです。現在は大使館と品川の通商代表部においてロシアの方々のために日本語、生け花教室を、大使館で友禅絵教室を定期的に行っています。5月には大使館付属学校で生け花と友禅の作品展示会を開催し、毎年ご希望の多い着物の体験会もあわせて実施しました。工場や皇居、庭園見学、相撲観戦、お茶会、きもの体験、日本料理や折り紙、ミニゆかた製作講習会等々、ご要望に応じ日本文化を体験していただいております。またロシア側からはロシア料理教室やヨルカ祭（ロシア正教のクリスマス）などにご招待いただくこと、コンサートのチケットを頂くこともあります。1泊2日のバスツアー（写真1）には、今年は日ロ合わせて50名の方が参加しました。



写真1.バスツアー 成田山にて

一般向けには日ロの学生が多く参加するバーベキュー、田植え、釣り、ハイキング、餅つき、和紙作り体験会などがあり、若い方の貴重な交流の場となっています。そして、懇話会では、歴史、文学、経済をテーマとした講演会が、学者、ジャーナリストなど様々な分野の講師を招いて開催されます。

私たちは、日本の文化に触れることと同様に、ロシアの文化に対する理解も深めてほしいと思っています。毎月、ロシア人講師によるマトリョーシカ絵付け教室がありますが、ロシアに馴染みのない方も通ってくださっており、それをきっかけにロシアに興味をもたれる方もいらっしゃいます。また、ロシア民謡をロシア語で歌う会が活動しており、夏にはロシアの夏至祭（イワン・クパーラ）もあります。

会員向けサービスとしてロシアへの留学をお手伝いしています。ロシア語が堪能な専任の担当者を置いています。収益事業ではありませんので手数料も格段に安いです。今年は、1週間の夏期短期留学を計画し長期留学の手掛かりとしてもらうことになりました。このほか、経験豊富なロシア人教師を中心にレベル別にロシア語教室があり夏期合宿もしていますし、ロシア語を母語とする外国人向けの日本語教室も随時行っています。

そして、協会では毎年2回ほどロシアの各地を訪問して日本文化を紹介しています。内容は、きもの、茶道、折り紙、風呂敷、ちぎり絵、習字、剣術等々です。この10年の間に訪れた都市は20か所にも及び、各地で報道され歓迎されてきました（写真2）。帰国後も交流が続いております。来日された方とは再会を果たし、また再訪を強く望まれています。



写真2.エカテリンブルグにて

協会会員向けには毎月「日ロ交流」紙を発行しております。活動についてお知りになりたい方は、是非ホームページ（<http://www.nichiro.org>）をご覧ください。日ロの相互理解の一助となりますよう。



今年度は編集後記を担当することになりましたので、よろしくお願ひします。日本政府は北方四島の帰属の問題を解決して平和条約を締結するとの基本方針の下で、日露関係はかつてない程に盛り上がっています。学術関係もこの波に乗って一気に進展したいものです。次回は、ロシア科学アカデミーの大改革や日本とロシアの学生交流等を会員の皆様にお伝えしたいと存じます。 (工藤 純一)

“Ushitora” is a Japanese word for the “Ox-Tiger”; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第73号 2017年7月25日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学東北アジア研究センター 一気付
PHONE: (022)795-7580 FAX: (022)795-7580
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/> E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp